太田昭臣著

中学教師

岩波新書

262

太田昭臣著

中学教師

岩波新書

262

太田昭臣

1930年群馬県に生まれる
1951年日本大学芸術学部卒業
現在—茨城県竜ケ崎市立城西中学校教諭
著書—「生活綴方教育の探求」(民衆社)
「生きる力を育てる班ノート・学級通信」(明治図書)
「子どもとともに考える進路・進学」(あゆみ出版)
「学級のとびら」(共著，日本書籍)
「なぜ生活綴方を選んだか」(編著，明治図書)

中学教師　　岩波新書(黄版) 262

1984年4月20日　第1刷発行 ©
1984年11月10日　第2刷発行

定価430円

著者　太田昭臣

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan

目　次

第一章　若い教師の現実と苦悩……1
1　教師の中にかくされた問題……2
2　若い教師の生育史……24
第二章　わたしが教師になるまで……43
1　敗戦の衝撃と自立への模索……44
2　教師への道……62
3　非行少年がわたしを教師にした……82
第三章　家庭の中の子ども……103
——いま、子どもに何が起っているか1
1　家庭における子どもの位置……104
2　家庭の教育力の衰退……113
3　新しい貧困……126

4　自分史を書かせる……137
第四章　学級の中の子ども……143
——いま、子どもに何が起っているか2
1　学級編成……144
2　学級の主人公はだれか……150
3　教師のひとこと……165
4　「国宝」から人間へ……168
5　低学力の克服……177
第五章　いま、教師が教師でありつづけるために……193
1　子どもをとらえる指導のために……194
——「群れ」から「集団」へ
2　人間的な教師であるために……208
あとがき……217

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第一章　若い教師の現実と苦悩

茨城県竜ケ崎市立馴柴中学校一年生
の作品（以下同じ）

1　教師の中にかくされた問題

戦後第三の非行の時代

普通の子といわれる層にまで今、人格的な崩れともいえるようなさまざまな問題が起ってきている。それが戦後第三の非行の時代といわれる今日的な特徴でもある。終戦直後および一九六〇年代高度成長期の第一、第二の非行の時代にはみられなかった姿である。

そうした表れも、もうかれこれ十余年の歳月が流れようとしているのに、その勢いはかげりを見せようともしていない。しかも、子どもの非行克服のために、多くの教師は苦闘という言葉でいい表される以上の努力を重ねてきたにもかかわらず、ますます問題は深刻化し、激化の一途をたどっている状況である。

そのため、非行・問題行動という課題は、単に学校教育ばかりでなく、家庭教育、ひいては「教育」と名のつくあらゆる分野の課題にすらなっている。だから、教師ばかりではなく世の親たちまでも、「今日の子どもの現実はどうなっているか」「自分の子ども自身に危機はないの

か」「ある日突然、衝動的な行為に出られるのではないか」という不安と焦燥が、心の底に暗い影をおとすまでになっている。

子どももそれ自体、個としての社会的な存在である。常にひと・もの・こととかかわって生きてきたのだし、今も生き続けている。ということは、子どもは個として存在しながらも、子どもをとりまく地域・家庭・学校(学級)の環境や現実に影響をうけながら成長しているということである。そのことはおのずと政治・経済・社会・文化にも直接間接にかかわっていることになる。

子どもの状況の深刻化は、子ども自身がつくりだしたものではない。子どもをとりまく諸現象の反映でしかない。とすれば、子どもの現実を凝視し、問題点を明らかにしつつ、その現実をとらえる視点を教師みずからのものにすることを通してその克服は可能になる。このことについてはここでは深入りせず、あとの章以下で述べることとする。

というのは、学校教育はいかなる時代でも地域や家庭にしっかり立脚し、そこに深くかかわりながら実践がすすめられねばならないからだ。わたし自身、敗戦後数年して中学教師になってはや三十余年、その教育実践にあたっては地域や家庭に依拠せざるをえないことが多かったといえる。しかし、地域や家庭の現実、問題点を把握すればそれだけで教育実践が可能になる

とはいえない。地域や家庭、学校を問題にするまえに、それらに深くかかわる教師そのものを問題にしなければならない。

パン事件――教師の問題

ところで、教師そのものの問題はとかくタブー視されている。父母の間でもうわさ話やかげ口は聞かれても、直接教師に語りかけられ、話されることはほとんどない。教師間においてはいっそう困難をきわめる。といって、そのことをそのままにしておくことはできない。それでなくとも複雑化する現場の状況を克服するためにはなおさらである。

教育現場には日々さまざまな問題が起っている。つぎに掲げる作文も、ある日のふとした事件を書いたにすぎない。しかし、そこには教師のあるべき姿が問われる内容が、克明に書かれている。

パン事件　　中二　川上正子

一月二十七日水曜日の放課後のことです。三、四時間の美術の時間におわらなかったドライポイントを仕上げようと倉本さんといっしょに美術室に行ったのです。さいわい担当

の松本先生がいらっしゃったので、教えてもらいながらやっていました。
そこにいつも一緒に帰る加藤さんがやってきて、いつとはなしに手伝ってくれていました。そうしているうちに加藤さんが、「あーあ、なんかおなかすいちゃった」と独り言のようにいったのを、わたしは耳にしました。手伝ってくれていて、しかも帰りを遅くしては悪いなと思ったとき、カバンの中に給食で残して持ち帰ろうとしたパンのあることを思い出し、
「給食のパンあるよ」
といってしまったのです。
そもそもこれが事件のはじまりになってしまったのです。
わたしはさっそくパンをとり出して加藤さんにあげました。加藤さんはとなりにすわってよろこんで食べ始めました。わたしは、ドライポイントをほっていたので、加藤さんが時々ちぎって口に入れてくれたものを食べていました。
そこに今まで倉本さんに教えていた松本先生が来て、今度はわたしにアドバイスしてくれました。松本先生は、わたしたちがパンを食べているのをみて、
「おいしそう……」

といったので、加藤さんはわたしにしたと同じように、松本先生の口にちぎって入れてやったのです。松本先生は、加藤さんにそうされるままに食べていました。わたしも食べつづけていました。

そのころ同じ学級の伊能さんたち何人かが、部活動の集まりがまだ少ないということで遊びに来ていました。なにかと雑談をしていたようですが、わたしたちがパンを食べているのをみて、だれかが、

「食べる?」

といって、伊能さんにわたしと同じように持ち帰るはずのパンを差し出したようでした。それから食べながら大声を出して話していました。

それから少したって、わたしたちは食べ終わりましたが、伊能さんたちは食べ続けていたようです。

急に戸がガラガラと開きました。わたしはハッとおどろいて戸の方をみたら、それは田山先生でした。田山先生は伊能さんたちをみつめて、すごくおこっていました。

「こんなところで、コートを着て立ち食いとはなんだ。化粧なんかするくせに立ち食いとは……」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

わたしはあまりのけんまくにおどろいてみていると、伊能さんたちは友だちに、
「こんなところ早く出よう」
といって、パンを持って美術室から出ていこうとしました。すると田山先生に、
「お前ら、ちょっとこっちへ来い」
と呼びとめられて、みんなの前に引きもどされてしまいました。
伊能さんにあとで聞いたのでわかったのですが、そんな行動に出てしまったのは、田山先生が「化粧なんかするくせに」といわれたことが頭にきたからだと話していました。それがまた対立をはげしくする結果にもなってしまったのです。
田山先生はつづけて、
「だれが出ていけといった。それに食べながら出ていくとは……」
と、どなったのです。伊能さんの言ったことばに怒りをもっているようでした。ところが伊能さんはまけじと、
「パンを食べながらなんか出て行ってません！　パンを持って出て行ったんです」
とはっきり言いました。すると田山先生は、
「パンを持って出て行けば、わたしはパンを食べています、と言っているのと同じだ！」

と、いい争いになってしまいました。
その時、パンを一緒に食べていた松本先生は、はじめは田山先生のわきに立って話を聞いていましたが、いつのまにかほかの生徒のところに行ってしまっていました。わたしがそんなことを気にしていると、田山先生は、
「みんなのじゃまになるといけないから、椅子をもってとなりの部屋へ来なさい」
と、おこりながらいいました。伊能さんたちは少しぐずぐずし、「まだ話すの?」「はやくしろよ!」といった顔つきをしていました。
教官室へ入ってしまいましたが、話はきこえてきます。わたしが原因をつくってしまったことに責任を感じているからかも知れませんが、聞きとろうとしていたのでしょう。
「ここのところに、学校で物を食べちゃいけないって書いてあるだろう」
と、何かの本を示しながら(まだわかんないか)という感じで田山先生は言いつづけていました。伊能さんの態度からは、あまり反省しているようにはみえなかったけど、教官室へ入ってからは、「はい、はい」とうなずいているような感じでした。わたしは気になりながらもいたたまれなくなって家に帰ることにしました。
帰りながらもわたしは加藤さんとどうするか話しました。田山先生に「わたしたちも食

べていました」と、明日あやまろうということにしました。
その夜、気になって伊能さんに電話したのでしたが、家の人がいてはっきり話せず、次の朝に学校で聞くことにしました。
伊能さんの話は、次のようでした。
教官室に入ってからも、おこられているのをみんなはジロジロ見ているし、一緒に食べていた松本先生までがチラチラ見ながら通りすぎてしまうし、その時、松本先生の態度がとても頭にきたそうです。それに「伊能はいつも自分が有利になる答を出すからだめなんだ」といわれ、もしかしたら昨年のことで根に持っていることがあるのかなとも感じたというのです。そのあと、とつぜん「伊能は、去年おれが担任だったんだから、おれがあとでグチグチ言わないこと知ってるだろう」と言われた時、そうは信ずることができず、返事をしなかったというのです。また「あそこでまだ食べていた人いたな」といわれた時、「加藤さん」と答えてしまったともいうのです。
加藤さんはその話をきいて、
「早くあやまってこよう」
といって教室を出ていきました。私もあとをおいかけました。原因をつくったわたしがす

ごく悪いものに感じたのです。

ところが田山先生にあえず、放課後は先生たちの会議でだめでした。そこであやまりの手紙を書き、そこに「明日またまいります」と書きたして、隣りの先生におねがいして帰ってきたのです。

次の朝、加藤さんとわたしは田山先生にあい、あやまりました。わたしたちはすなおに、一言一言「はい」「わかりました」「すみませんでした」「こんどから気をつけます」と、ていねいにあやまりました。

わたしはここで一つ覚えました。それはあやまり方の問題です。伊能さんのように反抗すると、それだけ言葉が多くかえってきて、ていねいにすなおにあやまると、短くかんたんで、あまりおこられずにすむということです。

その日の昼休みに田山先生の組の人から「名前は出さないが」といって、わたしたちの「パン事件」を朝の会に話したそうなのです。伊能さんはその話を聞いて、「あとでグチグチ言わないって、やっぱりうそよ」と腹をたてていました。

時間がたつにつれて、伊能さんは松本先生のとった態度に疑いを持ちはじめ、信頼できそうだと思った坂上先生に体育館で偶然であったのでこの話をすると、

「おまえは、先生と生徒を一緒にする気か」
と逆におこられてしまったというのです。その話を聞いて松本先生とわたしは同じ立場なのに、そんな考えはたとえ先生でも許されるものではないと思います。
　ところが二十九日の金曜日の放課後、わたしたちが教室にいると松本先生が来て、伊能さんを見つけ、
「この間は不愉快な思いさせてごめんね。あれからどうした？」
と時々笑いながら聞いたのです。伊能さんは、
「あ、いいえ、あれから別にたいしたことありませんでした」
というと、松本先生は、
「ああ、そうだったの。じゃあね」
と帰っていってしまいました。伊能さんは、
「今ごろあやまるなら、あの場でわたしも食べましたといってほしかったわ」
と、つぶやいていました。
　わたしも松本先生のとった態度にずるさを感じました。今の若い先生たちにみられることのように思えてなりません。わたしは、そんなずるい人間にはなりたくありません。だ

からわたしは田山先生に加藤さんとあやまりにいったのです。だれがこの事件の始めから終わりまでの真相を知っているのでしょうか。一人一人が適当にどこかで考え、自分に納得させて思いこんでいるだけのような気がしてならないのです。

実際こうした出来事は、教育現場では日常茶飯事である。しかし、あまり問題にされないまま素通りされているということも事実である。子どもがこのように作文に書いてきたから問題に気づかせられるといってもよい。それは、教師のふとした言動が子どもたちにどう反映しているか、顧みることなくすごしている場合が多いということでもある。だから、こうした子どもの作文をつきつけられなければ、教師自身、自己をみつめ確かめることができない状況にもなっている。

けれども、このような作文を示されて教師がそれをみずからの問題として自己認識し、子どもたちにどう対応することが教師なのかを考えるならば、問題は解決の方向をたどることになる。教師たりとも人間である。人間である限りあやまちはある。そのあやまちをあやまちとして認め、それを乗り越えていくところに真の人間らしさがでてくる。それは決して教師としての権威を失墜することにはつながらない。かえって子どもと教師の人間関係の絆を強めることにもなる。今まで以上の人間理解を可能にする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton